

日本キリスト教会大阪北教会

2016年7月24日 礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書12章1～8節

12:01 過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。12:02 イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。12:03 そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。12:04 弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。12:05 「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」12:06 彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていたからである。12:07 イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。12:08 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

《説教》『マリア、主イエスに香油を注ぐ』

◆只今司会の上田長老はお祈りの中で、「今日の聖書の箇所は、その場面は鮮烈であります」と言われました。正に鮮烈でありますし、極めて厳しい状況の中でマリアの香油注ぎが行われたのであります。今日の箇所の初めのところに「過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた」とあります。私達はその直前の所を先週読んだのですが、そこを再度読みたく思います。「さて、ユダヤ人の過越祭が近づいた。多くの人が身を清めるために、過越祭の前に地方からエルサレムへ上った。彼らはイエスを捜し、神殿の境内で互いに言った。『どう思うか。あの人はこの祭りには来ないのだろうか。』祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するためである。」そして今日の「過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた」と続きます。このようにユダヤ当局はイエスを捕えて死に渡そうとする。そういう決意、そういう空気の中にエルサレムがあります。そのエルサレム郊外のベタニアにイエス様が行かれたのです。正にこれは死を覚悟しての「ベタニア行」であります。正に鮮烈であり、実に厳しい状況であります。

◆お祈りの中でもう一つ、イスカリオテのユダがマリアの香油注ぎを、厳しく咎めました。「その香油をお金に代えて、貧しい人に施したら、どんなに多くの人を助けることができることか」と、もっともらしいことを言いましたけれども、彼にそのような意思はないわけであって、むしろ彼はお金をごまかしていたのです。「このイスカリオテのユダはどこへ行くのでしょうか」と祈られました。マタイによる福音書27章よれば、彼はこの後、「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言って、「首をつって死んだ」のです。これが、罪を犯した者の赴く先であります。しかし聖書によれば、イエス様はユダの裏切りのことは承知しておられました。そしてイエス様がユダに「友よ、あなたがしようとしていることを

するがよい」と言っておられます。イエス様はユダの裏切りを承知の上で「友よ」と呼びかけておられるのです。この「友よ」との呼びかけを受けて、ユダはイエス様の真実を、その真の愛を覚りました。それで、「自分は取返しのつかない過ちを犯してしまった」と悔いて、首を吊って自殺したのです。

◆そういう次第であります。あのカール・バルト先生は、このイスカリオテのユダは、弟子たちの中の一人の裏切者というのではなくて、正に「彼はキリストの弟子の代表である」と言っております。換言すれば、「キリスト者は例外なくイスカリオテのユダである。ユダを責められるようなキリスト者は一人もいない」と言うことでもあります。弟子の代表とも言うべきペトロも、その直ぐ後、イエス様との関係を否認しました。一体、イスカリオテのユダとどこが違うのか、ということでもあります。ですからイスカリオテのユダに救いがないのであれば、全ての人に救いはありません。けれどもユダが悔いて首を吊って自殺したことの中に実は救いがあるわけです。ユダはイエス様の「真実」を覚ったので、自殺したのです。私の若い友人も、「これで死ぬことができる」と書き置きして、服毒自殺しました。ですから、私たちは人を外観で判断する事はできないのです。自殺を勧めることはだれにもできません。けれども救いを見出したので、死ぬことができるという、人間の深層があるのです。今日の聖書の始めに「そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた」と記されています。死で終わるのではありません。復活があるのです。

◆ところで、イエス様は本当に毎年過越の祭にエルサレムに上られました。幼児期からです。長じてからもそうです。しかし今回の過越祭の宮詣では、これまでとは違います。そこに行けば、もう生きては帰れない。そのことを承知の上で行かれたのです。それでイエス様への香油注ぎの話であります。これは4福音書全てに出ています。4福音書全てに出ている話はそんなに多くはありません。どの福音書も全て、選りすぐりの資料を、編集に編集を重ねて出来たものです。そしてどの福音書もこれは外せないという思いで、このマリアによる香油注ぎの記事を載せたのです。ただ今日のこのヨハネ伝は、香油を注いだのは「マリア」と特定していますが、他の福音書では「マリア」とは書いていません。ルカ福音書では「この町の罪の一人の罪深い女」という書き方をしています。もしそれがマリアと同一人物であるならばマリアはその街で誰知らないことのない罪の女であったということになります。そして「ベタニア」についても、マルコ福音書では、古い訳によれば、「イエスがベタニアでらい病人シモンの家にいて」となっています。「ベタニア」は「苦しむ者の家」とか「貧しい者の家」とか「悩める者の家」という意味の村名でした。そこに「らい病人シモン」がいて、その家での食事の席で罪深い女がイエス様に香油を注いだとなっています。ですから一つの歴史的事実を4福音書がそれぞれの観点から描いたのだとすれば、色んな事が見えて来ます。

◆ところで、今日の箇所(3節)を見ていただきますと、こうあります「そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を1リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった」と。この記述からみなさんはどのような情景を思い浮かべられますか。イスラエルでは食事をする時、長椅子に横になって、左手で肘をついて、右手で食べると言われています。ですから「足に香油を塗る」というのも頷けます。ほかの福音書を見ますと、ナルドの香油の入った石膏の壺を割って、頭に注いだと書いてあるものもあります。「頭に注いだ」のか、「足に塗った」のか、その違いだけでも相

当イメージが変わりますね。わたしは読み比べてみて、いずれにしても、イエスの足に「塗る」というのは違うと思いました。この「塗る」と訳された言葉は「注ぐ」とも訳せます。1リトラは326グラムです。相当の量です。ユダは、「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」と言っています。300デナリオンというのは通常1年の給料相当額です。訳としては、「塗る」でも「注ぐ」でも正解です。それで「塗った」とします。香油ですから少しだとしても、その香りは部屋に満ちます。しかし「塗る」程度の量ならば、ユダの言葉がピント外れになります。「三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。(もったいない)」と言っているのですね。ここは、やはり「注ぐ」と訳さなければならない箇所だと思います。イエス様の足に水を注ぐように、惜しげもなく香油を注いだのです。マリアの感謝がみなぎり溢れたのです。

◆イエス様は、ユダの言葉に対して言われます。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない」と。イエス様は自分の地上の歩みの終わり、死が近いことは自覚しておられるわけです。〈わたしは間もなく葬られる〉と。ユダヤのしきたりでは、横穴式の墓に葬ります。ラザロの場合がそうでしたね。そして、墓に香油と一緒に置くのです。それでヨハネ福音書だけが記しているこういう記事があります。19章38節以下です。「その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフがイエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」と。マリアは1リトラです。ニコデモが持って来たのは百リトラです。30キロです。30キロもの没薬と沈香を混ぜた物を持って来て、それをイエス様の墓に入れたということです。マリアは「わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのだ」と主は言われます。結局、誰もイエス様が十字架であのような形で亡くなられるとは思っていませんでしたから、誰もイエス様が葬られた時に、習慣に従って、香油を塗る、或いはお墓に収めることができませんでした。ヨセフとニコデモだけでした。マリアの香油注ぎは、イエス様の心底からの感謝の表現です。それが葬りの備えともなったのです。これは正にマリアの信仰と愛と希望と感謝を表す象徴的行為であったのです。

◆ところで、わたしたちはイエス様のことを「イエス・キリスト」と言い慣わしております。そしてクリスチャンの最初のもっとも短い信仰告白は、「イエスは主なり」という表現です。イエス様は「主」であられる。当時「主」と崇められたのは旧約聖書の「神様」と「ローマ皇帝」だけでした。そのような時代状況の中で、「イエス様こそ主であられる」とキリスト者は告白したのです。一方、「キリスト」という言葉はギリシャ語です。旧約聖書のヘブライ語では「メシヤ」です。意味はどちらも「油注がれた者」ということです。因みに英語では、「メサイヤ」となります。日本語では「救世主」と訳されています。それでは、「油注がれた者」とは誰のことか。ユダヤ・イスラエルのしきたりでは、王の就任式、大祭司の就任式、預言者の就任式に際しては、その頭に香油が注がれます。ですから「キリスト」＝「油注がれた者」とは、王・祭司・預言者のことです。それを表すのです。ですからマリアがイエス

様の足に、頭に、1リトラもの香油を注いだということは、溢れる感謝の表現であると共に、イエス様こそ「王・祭司・預言者」だと告白する、象徴的行為ともなったのです。

◆ヘンデルの『メサイヤ』の第Ⅱ部の最後に、あの有名な「ハレルヤ」コーラスがあります。その中で“King of Kings, and Lord of Lords, Hallelujah!”（「主の主、諸王の王、ハレルヤ」）と歌われます。「マリアの香油注ぎ」以上の「メシヤの就任式」は考えられません。ですから、マタイ、マルコの福音書では、この香油注ぎの記事の最後の所で、イエス様はこう言われます。「はっきりしておく。世界中どこでも福音が述べ伝えられるところでは、この人のしたことの記念として語り伝えられるであろう」と。イエス様の福音が述べ伝えられるところでは、世界中どこでもマリアのしたことが記念として語り伝えられると、イエス様は言われます。つまり、「キリストの福音」と「マリアの香油注ぎ」は一對だということです。福音が語られて、それに対する感謝、信仰告白、喜びを持った香油注ぎが伴わないようであれば、その告白は、真実に欠けると言うことではないでしょうか。ですから私たちは聖書のどこを読んでも、このイエス様のお言葉に従えば、今日のこの箇所に記載されていることが、質的には語られていないような箇所は一つもないということなのです。

◆それでわたしたちの人生でありますけれど、今のようなイスカリオテのユダのような自殺というふうなことも起こるのですね。1日あれば、1週間あれば何でも起こるのが人生です。そして人間の力では防ぎようがないようなことが起こります。しかし今日のこの聖書によれば、それらの負と思える、マイナスと思える一切の出来事を凌駕する神の愛、キリストの愛が万事を貫いているのです。キリストの福音がすべてを覆っているのです。キリストの愛があふれていないような時も所も人もありません。

◆3節に「家は香油の香りでいっぱいになった」とあります。正に感謝、愛、喜び、そういう香りで充満したというわけですね。なぜならそこにイエス様御自身がおっしゃったように、自ら復活であり、命であられる主イエス様がそこにおられるからです。そしてそのイエス様によって復活の命を与えられたラザロがそこにいるからです。今日のこの箇所、マルタ、マリア、ラザロもおり、弟子たちもいるこの夕食に優る最後の晩餐があるのでしょうか。

◆正にここに詩篇第23篇の信仰が現実になっています。蘇りであり、命であられるイエス様がそこにおられ、イエス様によって復活の命を与えられたラザロがそこにいます。そして、これが教会ではないのでしょうか。これが礼拝ではないのでしょうか。そして正に信仰告白と感謝の化身になっているマリアがそこにいるわけであります。毎週日曜日に私たちはこうして礼拝を守っていますが、思いを新たにしてください。これから礼拝を守る時、わたしたちは自分なりのナルドの香油を携えて礼拝に赴く。そのとき、神の愛、キリストの愛、そしてそれへの感謝の香りがみちあふれる。そうでなければそれは礼拝ではない。そうでなければ感謝ではない。そうでなければそこに救いはない。そういうことになるのではないのでしょうか。

◆お祈りいたします

愛に富み給う主イエス・キリストの父なる神様

今日もみ言葉を与えられ感謝いたします。誠に、あなたの御言葉こそ、私たちの生きる時、死ぬときの唯一のよりどころであります。どうか今一度生けるあなたの恵みの御言葉を全身全霊で受け止め、あなたへの感謝を捧げるわたしたち一人一人であらしめてください。この祈り、主イエス・キリストの御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。